



【本教材のガイダンスと到達目標】

対象者： 福岡県公立高校入試を受験する中学 3 年生（および指導者・保護者）

特に向いている生徒：

- ・ 一問一答では答えられるのに、写真・系図・史料文・機構図が出されると別物に見えて解けなくなる生徒
- ・ 「平等院鳳凰堂」の写真を見て「頼通」は浮かんでも、「摂関政治」という政治体制へ思考がつかない生徒
- ・ 資料集の系図や関係図を「ただの図」として眺めており、矢印や血縁関係を言葉に直せない生徒
- ・ 同一の歴史事項について、問いの角度が変わるたびに失点してしまう生徒

このプリントでできるようになること：

1. 単一の重要概念（摂関政治、鎌倉の主従関係、明治立憲制など）を、「人物」「建築・史料」「系図・関係図」「制度記述」の 4 つの切り口から自由に行き来できるようになる。
2. 略系図や統治機構図などの視覚的資料から、制度の客観的構造を読み取って指定語句で記述できるようになる。
3. 建築・絵巻物・条文などの歴史資料を、単なる暗記対象ではなく、政治体制や社会背景を読み解く手掛かりとして扱えるようになる。
4. 過去問で頻出する中核テーマに対し、どの入口から問われても同じ核（コア）に着地して正答を特定できるようになる。

推奨する使い方：

Step 1（理論の整理）： 第 1 章・第 2 章を読み、福岡県入試における「摂関政治」の 5 年度の出題推移から、なぜ多角的な照合が必要なのかを理解する。

Step 2（自力演習）： 第 3 章の実戦定着ドリル（4 大テーマ・全 15 問）を、解説を見ずに解く（目安時間：25～30 分）。

Step 3（照合の確認）： 解き終わった後、「今解いた小問が 4 つの切り口のどれに該当するか」を意識しながら解答解説を読む。

Step 4（誤答分析）： 答え合わせの際、各問の「誤答原因チェック欄」を使い、ミスの原因が「用語自体の未定着」なのか「図表からの情報抽出ミス」なのかを言語化する。

Step 5（過去問演習）： 第 6 章の「過去問演習 組み合わせ優先度表」に従い、実際の入試過去問で多角照合の感覚を定着させる。

【冒頭 1 分要約：15 年分析が導いた結論】

【結論】重要概念は、1つの用語暗記ではなく「4つの切り口（人物・文化史料・関係図・制度記述）」を結ぶことで、あらゆる出題形式に対応できるようになる。

2012～2026 年度の 15 年間の出題データを分析すると、歴史大問 1 の重要テーマには以下の特徴が確認できる。

1. 同一概念の反復と多角展開：「摂関政治（藤原氏）」は 15 年中 5 年度（2012・2014・2015・2019・2025 年）で出題されているが、その切り口は「建築（平等院）」「人物（頼通・道長）」「親族関係の記述」「略系図からの言語化」と毎回変化している。
2. 一問一答の限界：「用語名⇔短文」の一対一対応だけでは、写真・系図・機構図などの資料と結びつかず、角度を変えられた瞬間に初見問題に見えてしまう。
3. 4 方向照合の有効性：重要概念ごとに〔①人物・時期〕〔②建築・史料・文化〕〔③関係図・系図・構造〕〔④制度説明記述〕の 4 要素をネットワーク化しておくことで、異なる資料・問われ方でも中核概念へ結びつけやすくなる。

★ 用語だけ覚えるな。「人物」「残した建築・史料」「関係図」「言葉での説明」の 4 点セットで概念を囲い込め。

第 1 章：15 年間の出題データと「摂関政治」の変遷

1. 15 年中 5 年度に見る「摂関政治」の出題実績（客観的事実）

福岡県公立高校入試の歴史大問 1 において、「摂関政治・藤原氏」は以下の通り、異なる切り口から繰り返し出題されている。

- 2012 年 問 3【建築・文化】：平等院鳳凰堂の写真・建築から、その背景にある摂関政治へ接続させた。
- 2014 年 問 1【人物（頼通）】：藤原頼通と摂関政治の関係性を問うた。
- 2015 年 問 2【親族関係の記述】：藤原氏が娘を天皇のきさきにすることに関する仕組みを記述させた。
- 2019 年 問 1【人物（道長）】：藤原道長と摂関政治の関係性を問うた。
- 2025 年 問 2【系図・構造】：藤原氏と天皇家をつなぐ略系図を提示し、外戚として政治の実権を握った理由を記述させた（指定語句：〔きさき〕〔即位〕）。

2. 多角照合が必要とされる理由

実際の入試では、教科書に載っている重要事項が、同じ形のまま問われるとは限らない。同じ「摂関政治」という核に対し、

- 文化遺産を窓口にするのか（2012 年）
- 歴史上の人物を窓口にするのか（2014 年・2019 年）
- 親族・婚姻関係の文章を窓口にするのか（2015 年）
- 系図の線と関係性を窓口にするのか（2025 年）

というように、提示する資料や問いの入口が変化する。どの入口から入っても同じ中核概念に着地できる状態を作ることが、本教材の目的である。